

藤田浩子の 少し昔のこと 〈92〉

人間は賢い

私が「人は人に育てられなければ人になれない」としつこく言ったり「子育ての領域にまで機械が入り込んでいる」と嘆いたりしていると、なんでも言い合える友達が「あんたは機械を目の敵にしているけど、そのうち人間より上手に子育てする子育てロボットが発明されるかもしれない、子どもを膝に乗せて絵本を読んでくれたり、負んぶして子守唄を歌ってくれたり、抱っこしてオシッコをさせてくれたり、ぎゅっと抱きしめて「かわいいねえ」と言ってくれるロボットができるかもしれない、などと言って、私を冷やかします。

子育てロボットの出現という方向にいかないとしても、人間はそれほど馬鹿じゃないから、今の状態がもっともっと進んで、小学校に通うようになってもおむつをしている子がたくさんいて、それが当たり前になれば、親も子もそのことを受け入れるようになると思う、機械の音が鳴っていないと落ち着かない子が出てきたり、負んぶや抱っ

こされることを嫌って1人でラックに座ることを好む子が出てくるかもしれない。また逆に、子どもの世話ができない親が大量に出てきたり、自分の思う通りに育てないからといって子どもをいじめたり殺したりする親がたくさん出てくるかもしれない、でも、そこまでいってしまえば、きっとその反動でべったりくっつけてかわいがる親もたくさん出てくる筈だと言って、私を慰めて(?)くれるのです。年寄りのあんたがぎゃーぎゃー騒がなくても、世の中の流れが自然にそうになっていくよ、心配しなくても大丈夫だよと、その友達は慰めてくれるのです。私はそれを見届けるまで生きてはいられないでしょうけれど、今までの歴史をみても、Aの方向に行き過ぎれば、反動でBの方向に進んでいくという事実もたくさんありましたから、そうなることを願いながら待ってみましょう。

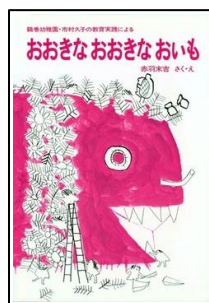


リレー連載 <225>

わたしの大好きな絵本

みきてい

大好きな絵本だったのに大人になるまで忘れていました。この絵本に再会できた時懐かしい幼少期の記憶が一気に甦りました。あおぞら幼稚園のおいも掘り遠足が雨で延期になった所から話が始まります。園児達が楽しみにしていた遠足。何日か



待てばおいもは大きくなるとさらに期待を膨らませます。いてもたってもいられない子ども達、紙と筆と絵の具でおいもを書き始めます。私の一番大好きな場面がここです。紙を何枚も

『おおきな おおきな おいも』

原案：市村 久子

作・絵：赤羽 末吉

出版社：福音館書店

何枚もつなげて、紫ともピンクとも言えない、まさにさつま芋の色の絵の具を作り出しどンドンどン大きなおいもができていきます。何ページも使い描かれた大きなおいもと強烈に心に残る色合い、幼稚園の時に先生に読んでもらった事を鮮明に思い出せるくらい、私の人生において絶対に必要であった絵本なのではないかと思うほどです。この書いたおいもがどうなっていくのかもこの絵本の楽しみの1つ。お腹がぐう〜となるかもしれないこの絵本、本当にお勧めです。